



Ultra Juicy Sisters

Original Story アトリエかぐや
[Berkshire Yorkshire]

Novelization 岡田留奈

Original Illustration Chocochip

プロローグ

5

第1章

23

第2章

63

第3章

99

第4章

165

エピローグ

201

プロローグ

「あ、杏子姉ちゃん……」

背筋が凍りつく。きゆう、とキンタマが縮み上がる感じ。鋭利な刃物を突きつけられ、冷静でいられる人間なんているわけない。ご多分に漏れず、俺……白川悠もそのクチだ。

「杏子姉ちゃん、そ、その包丁は？」

「え？」

さらさらとしたロングヘアに、アーモンド型の大きな瞳。ピンクのワンピースを涼しげに着こなしている彼女……白川家の三女である杏子姉ちゃんは、きよとんとした顔で持っていた包丁に視線を落とす。

「あれ？ 私、なんで包丁なんか持つてるんだろ」

それは俺が聞きたい。

「あー、そうそう。いまお料理してたんだ」

杏子姉ちゃんはほんやりとした様子で包丁を下ろした。

「でもヘンね。確かまな板の上に置いてきたはずなのに」

……ぞくつ。

俺はキッチンへと戻る杏子姉ちゃんの背中を見つめながら、自らの肩を抱いた。実はこ

の十分の間に、俺は四つの悲劇に遭遇したのだ。一つめは部屋の棚から工具箱が落ちてきて、ボールのような物が足の親指を直撃。その拍子にダンボールも落ちてきて見事頭にヒットしたのが二つ目。三つ目はそのダンボールの角に足の小指をぶつけ、階段で足を滑らせてダダダダと落下したのが四つ目。

断じて言うが、俺は体を張ってドジっ娘キャラを演じているわけではない。

義姉に突然包丁を突きつけられたのは、階段から滑り落ちて傷めた足をさすっていた直後のことだ。そこで俺は、ようやく悟ったのだ。

この悲劇の応酬は、偶然でもなんでもない。

俺の与り知らぬところで、なにかとてつもないことが発動しようとしている。認めたくはないが、やっぱりこれは。

——呪い。

物騒な二文字が頭をよぎる。なにを大げさな、と笑いたければ笑うがいい。むしろ誰か笑ってくれ。

そして頼むから誰か、俺の代わりに「汁」を集めてくれないか。

さて、話は一日前にさかのぼる。

学校が夏休みに入り、俺は長年住んだ町を出て、幼い頃に半年間だけ過ごした町を訪れていた。

目的地は、俺の親父が住む白川家。親父といっても、いまは亡き母さんの再婚相手なので、要するに義理の親だ。

幼少時代に実の父が他界し、母さんが再婚すると同時に、俺は白川家で生活を始めた。しかし半年後に母さんが病気で亡くなったとき、「これ以上白川家に迷惑はかけられない」と、母方の祖父母が俺を引き取ったのだ。

それから十数年間、祖父母のもとで平和な生活を続けていた俺だったのだが……。

『なあ悠、このまえテレビで観たんだが、いま海外で年金生活を送る年寄りが増えているみたいじゃないか。そこでバアさんとも話し合ってたんだが、ワシら来月からタイで暮らすことに決めたとぞ。ガハハハハ！』

などと、ある日突然ジイちゃんがのたまった。

メディアに踊らされすぎだぞジイ、なんて笑ってる場合じゃない。海外移住はもうすでに決定事項であり……つーか俺はどうなるの？

『一緒に来るかい？』

無理無理。タイ語はおろか英語だって喋れ^{しゃべ}ないし、リタイア族に仲間入りするにはまだ早すぎる年齢だろう。

それになにより、俺には好きな人……いや気になる人がいるのだ。とはいっても通学途中に駅で見かけるだけで、会話すらしたことないんだけど。

だからジイさん、申し訳ないけど俺はこの家でひとりで暮らすよ。

『ふむふむ。だがな悠、それは無理かもしれんぞ』
なんで？

『この家、もう売約済み。今月いっぱい引き払わんといかんのじゃ』

……はあああああああああ!!

と、いうワケで。

ひとり暮らしを断念した俺は、祖父母の意向(?)により、再び白川家にご厄介になることになった。

十数年も別々に暮らしてたくせに、今になって出戻るなんて向こうにしてみりゃ迷惑な話だと思うのだが、なぜか白川の親父は今回の件について大乗り気らしい。仕事の都合で家を留守にしがちなので、男手があるとなにかと安心なんだそうだ。

しかしなあ、と俺は思う。

居候いそうろうさせてもらえるのはありがたいんだけど、ホントにいいんだらうか。聞けば親父は今まいまさに出張中で、三人の娘たちが留守を預かっているという。

長女・恭子きょうこ。次女・涼子りょうこ。三女・杏子きょうこ。つまり、俺の義姉にあたる方々。

かつて幼少時代をともに過ごした少女たちは、いまや年頃の女性として立派に成長していることだろう。

そんな彼女たちと、必然的に同居生活を送ることになるワケで。ホントにいいんだらうか。親父よ。いろんな意味で。

「ああん、そんなとこダメだつてばあ」

どこからともなく甘やかな声が聞こえてきて、目が覚めた。

それは白川家に引越した翌朝のことだ。最初は夢かと思ったが、その声はどんどん大きく、そしてどんどん淫らな方向を目指していく。

「はんつ、あつ、クリちゃん舐めちゃダメえつ」

……………はい？

いよいよスルーできなくなつて、俺はベッドから飛び起きた。いま、なにげにとんでもなくデンジャラスな単語が聞こえてきたような気がしたんだが。

「やん、くすぐったいってば。あああん、そんなに舐めたら、ぬ、濡れちゃうう」

おいおい、なにやつてんだ！ 杏子姉ちゃん！

思わず俺はベッドから降り、床に耳をつけて、階下から聞こえる声を必死に拾う。

「はあつ、あん、クリ……ちゃん……つ」

うわずった声。甘い吐息。エロい単語。

間違いない。これは……オナニーだ。

俺の股間のアンテナがギンギンに反応している。まったく、俺はなんて不埒ふちちな男なんだ。義理とはいえ、仮にも姉である人の喘あえぎ声に興奮してしまふとは。しかし誰よりも不埒ふちちなのは朝っぱらから自慰行為に及んでる杏子姉ちゃんである。

「ひああ、あつ、あああつ」

最初は遠慮がちだった声が、いまでは家中に響き渡るほど大胆なボリュームになっている。し、信じられない。あんなに清純そうなルックスで、「エッチなことなんてわかんない」みたいな顔しておきながら早朝からオナニー三昧さんまいとは！

「もう、杏子ばかりずるいじゃないのよ。私も舐めて♪」

……って、涼子姉えも参戦かよ!?

俺は勃起しつつもショックを隠せない。てつきりソロプレイで楽しんでいると思っただのに、まさかの飛び入りである。しかも実姉。

この家は、いったいどうなっておるのだ。

さすがの俺もようやく冷静になってきた。確かに白川姉妹はちよつと変わっているといふか、特に上のふたりは人一倍あけすけといふか開放的といふか大胆な性格で、昨夜も俺



が風呂に入ってるときに素っ裸で乱入してきたりもしたんだけど、そもそもあれは恭子姉さんが酔っぱらってただけの話であり、俺は悪くない……なんて言い訳はさておき。

「や、やん、お姉ちゃん、無理に動かしちゃいやっ」

「いいじゃないのよ、私だってイイ子イイ子したいんだから」

「でも、でも……あふうんっ」

この状況を一言で表すなら、「禁断」である。

ああ、気になる気になる気になる。一階がどんなふうになってるのか気になる。俺はたまらなくなつて立ち上がり、パジャマ姿のまま忍び足で部屋を出た。

「ほら、クリちゃん舐めて〜♪」

「もーう、お姉ちゃんつてばー」

物音を立てないように、ゆつくりと階段を下りていく。

姉たちの喘ぎ声はますますヒートアップし、俺の鼓動もしだいに速くなる。自分の若さを呪いたくなるほど強力に勃起中。

ああいかん、焦ってはいかん。これじゃまるで、ノゾキ行為に挑む痴漢みたいじゃないか。でもでも、もうこれ以上欲求を抑えることができない……。

「なーにしてんのかしらっ。悠クン？」

——え？